

## (別紙2) 審査の結果の要旨

小松 愛子

本論文は、近世城下町の内部あるいは縁辺部に立地する江戸・浅草寺と、越後長岡・安禅寺という二つの天台宗東叡山寛永寺直末寺院をおもな対象として、寺院の組織・運営と、寺院を核として形成される社会・空間構造の解明をめざしたものである。都市史と宗教社会史の接点に位置する研究であり、序章によれば、それぞれについて次のような意図を有する。

近世都市の中心である城下町は、城郭を中心に武家地・寺社地・町人地など、結合原理を異にする諸身分によって分節的に構成されており、その全体像を捉えるためには、大寺院を中核に形成される寺社地・「寺院社会」の分析が不可欠である。それらの大寺院は領主として周辺に所領を有することが多いが、寺院の本体や所領の構造分析は十分になされていない。

また近世の天台宗は、徳川家の菩提を弔い東照大権現を祀るという幕藩権力にとって枢要な役割を果たしたが、教団構造については未解明の部分が多い。こうして、天台宗の頂点に立つ輪王寺宮門跡(寛永寺貫主)が別当を兼帯した浅草寺、および寛永寺執当が住職を兼帯した長岡・安禅寺という両直末寺院を取り上げることは、近世天台宗教団の構造を解明する上で有意義であり、江戸と長岡、両城下町の社会構造分析にも資するものである。

第I部では、浅草寺を中心に論じる。同寺はもともと浅草に所在したが、徳川将軍家菩提所として寛永寺が創建されるとその直末寺となり、1740年に輪王寺宮門跡が別当を兼帯すると、門跡の御内家来から別当代が派遣された。第1章では門跡御内組織の概要、別当代による浅草寺支配、彼らに支配され本堂の運営からほぼ排除された浅草寺一山寺中(衆徒・寺僧)のありようを剔抉する。第2章では浅草寺代官本間役所が編纂した史料を紹介しつつ浅草寺の俗役人の全体像に迫り、第3章で浅草寺へ出入する商職人の実態を、第4章で江戸の周縁部に所在する末寺の一例(浄光寺)を提示し、補論一で本山寛永寺の収入構造と貸付金の運用を検討する。

第II部では、長岡城下に隣接する蔵王町の安禅寺をとりあげ、まず第5章で寺領・境内の社会・空間構造、収入構造などを概観する。安禅寺住職は寛永寺執当が兼帯していたが、天保期に寛永寺から住職が送り込まれると寺中・領民が不帰依を申し立てる一件がおき、その後、蔵王町と長岡町との間で信濃川通船に関する訴訟事件もおきた。第6・7章でこれらの経緯を整理し、寛永寺による支配、城下町に隣接する寺院領主やその所領・寺院社会の特質を論じる。補論二では、同じく譜代藩城下である武州川越の仙波喜多院を素材に、その空間構成・僧侶・貸付金について整理する。

以上のように本論文は、城下町周辺に展開する天台宗一山寺院の組織・運営とそれを取り巻く社会・空間構造を詳細に分析した労作であり、基礎研究として高い価値を有する。検討成果を敷衍し、論点を十分に深めるに至っていない点は惜しまれるが、本委員会は上記のような成果に鑑みて、博士(文学)の学位を授けるのにふさわしいと判断した。